

楽典和声講座 演習問題 #03 スケール 解答

今回は色々とぼかして扱っているため、音名の違いなど、細かい違いは○にします。

※今回は問題の都合上、各章のサブタイトルを隠しています。

また、移動ドとの対応のため主音はC（短音階はA）に固定し、音名はすべてイタリア音名とします。

1. スケールとは？

◆次の文章はスケールについて述べたものである。空欄を埋め、選択肢は適切なものを丸で囲め。

スケールとは、（主音・根音）と呼ばれる「はじめの音」から、その（5度・オクターブ）上の音までをどのように分けるか、という規則である。言い換えると、スケールは音の（長さ・幅）の積み重ねである。一つの曲の中の和音やメロディは、原則として一貫したあるスケールを基に作られており、たとえば「さくらさくら」などの近世邦楽で用いられているのは（都節・民謡）音階であり、この音階を含む日本特有の音階の多くが（5）つの音からなる。このように、スケールが音楽の雰囲気を決め、地域や時代を特徴づけるのである。

2. 長音階

◆次の文章は長音階について述べたものである。空欄を埋め、選択肢は適切なものを丸で囲め。

長音階とは、西洋音楽でよく用いられる（明るい・暗い）音階である。イタリア音名で言い表すなら、言わずと知れた（ドレミファソラシド）のことであり、全音を全、半音を半で言い表すなら、音の幅は（全全半全全全半）となる。

3. 自然短音階

◆次の文章は自然短音階について述べたものである。空欄を埋め、選択肢は適切なものを丸で囲め。

自然短音階とは、西洋音楽でよく用いられる（明るい・暗い）音階である。イタリア音名で言い表すなら、（ラシドレミファソラ）となる。一見すると、長音階と使っている鍵盤が同じなので、同じスケールではないかと思ってしまうが、「はじめの音」が（ラ）であるので、全音を全、半音を半で言い表すなら、音の幅は（全半全全半全全）となり、たとえ同じ鍵盤を使っている、実際は異なるスケールであることがわかる。

4. 和声的短音階

◆次の文章は和声的短音階について述べたものである。空欄を埋め、選択肢は適切なものを丸で囲め。

自然短音階には一つ問題点がある。それは「はじめの音」に向かうための音である（属音・導音）が、うまく機能しない点である。そのため、（ソ）の音を半音（上げて・下げて）対応したものが和声的短音階である。この音階は主に（和音・メロディ）を作るのに使われている。

5. 旋律的短音階

◆次の文章は旋律的短音階について述べたものである。空欄を埋め、選択肢は適切なものを丸で囲め。

和声的短音階にも一つ問題点がある。それはファからソ#までの幅が半音（3）つ分と広く、メロディの中で落差となって不自然さをもたらす点である。そのため、さらに（ファ）の音を半音（上げて・下げて）対応したものが旋律的短音階である。この音階は主に（和音・メロディ）を作るのに使われている。

Hint. ピアノの鍵盤

